雄花が少ない中村系「太秋」の特徴

砥部町で見つかった有望系統

1. 太秋は年々雄花の着生が増加し収量確保が難しい

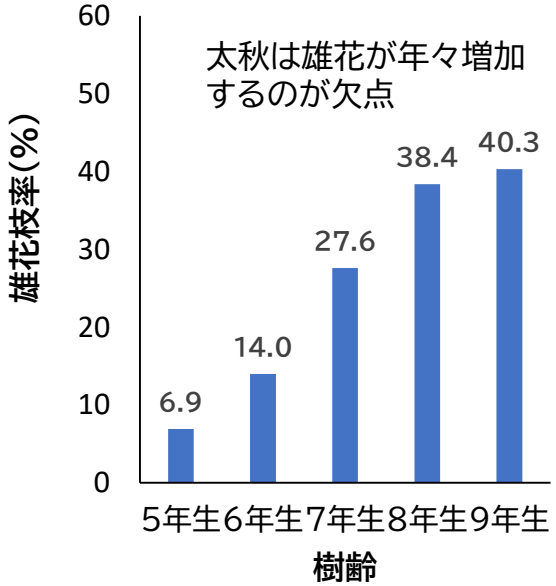

図1　太秋の雄花枝率の推移(2007-2011)

2. 中村系 '太秋' の雄花枝率、果実品質、収量

供試樹[z]：中村系「太秋」3樹、「太秋」6樹

表1　雄花枝率[y]の推移　(単位:%)

区　分	2020年	2021年	2022年
中村系太秋	0	0	0.4
太　秋	28.1	36.7	21.9

[z]樹齢:2020年は中村系7年・太秋18年、2021年は中村系8年・太秋19年、2022年は中村系9年・太秋20年
[y]雄花が着生した新梢の割合。

表2　果実品質、収量(2021年)

区　分	果実重(g)	果皮色[z](果頂部)	糖度(°Brix)	果肉硬度(kg)	収量(kg)
中村系太秋	304	3.4	13.8	1.49	23.8
太　秋	284	3.7	15.3	1.38	16.6
有意差[y]	ns	ns	*[x]	*	ns

[z]カキ　カラーチャート。
[y]t検定で*は5%水準で有意差あり。nsは有意差無しを示す。(中村系n=3、太秋n=6)。
[x]糖度の有意差は収量の違いが影響したものと推察される。

中村系「太秋」は、雄花の着生が極めて少なく、安定生産が期待できる。